闘病日記
前編（7月１２日～7月２５日）

2000年７月１２日（水曜日）　天気（曇り時々晴れ）
　今日から僕は横須賀にある精神病院（国立療養所久里〇病院）に入院する事になった。朝は早くから家を出て、兄貴の運転する車で母親と一緒に病院に向かった。
　そして病院に着くと簡単な検査を終えて僕はそのまま閉鎖病棟に移された。閉鎖病棟とはいえ外観は新しく清潔そうに見えたので入るまではどちらかと言うと良い印象があったので、僕はそれなりに大丈夫って自分に言い聞かせていた。けれど中身は案の定僕の印象とは全く違っていた。見あたる患者は見たからに重傷な患者ばかりだ、そこはまるで、僕の想像を遥かに超えた世界のようだった。ヘッドギアを頭に着けている患者もいれば、よだれを垂らしながら意味不明な事を話している患者もいる、車椅子でノロノロ行ったり来たりしている人もいれば大声で叫んでいる人もいた。きっとこの中でまともなのは僕だけなのかもしれないと僕は思った。けれど医者の目から見ればきっと僕も同じ、僕だけが特別じゃないのかもしれない。僕はこのところ自閉症ぎみになっている。だから部屋とベットと処方箋があれば他には何もいらない。誰とも友達にはなりたくない、誰もが僕の存在を透明なガラスとでも思ってくれればそれで良い、だから僕は目立たずにその日を過ごすことにした。けれどそんな新顔の僕をほっといてくれる訳は無い。こう言う病院というのは入院歴３ヶ月、半年なんて当たり前の様にいる。だからある意味その病棟全員が、仲間や家族の様な感覚が成り立っているんだ。そこに新顔の僕が来れば黙っていても興味本意の視線が僕に注がれる。それにこの病棟は一階建ての平屋見たいな造りになっていて、中央に卓球台や漫画や週刊誌が置かれたロビーがあり、そのロビーを挟んで正面から見て左側が女子の部屋で、右側が男子の部屋となる。たったそれだけの空間しか与えられない、それにただ閉鎖病棟に入院と言う事だけで全ての自由は奪われる。だって僕ら閉鎖病棟の人間は数メートル先にある本館の売店にさえも自由に買い物に行くことも許されてはいない。勿論携帯電話なんてもってのほかだ。ノートパソコンでさえ、決まり事には禁止と大きな文字で書かれている。ただ理由の本当の意味がコード類（紐のような物）がある物は基本的に首吊り自殺をされる可能性がある為に禁止とされていた。けれど運が良いことに僕のノートパソコンはバッテリーで起動するので、充電の時にナースセンターで充電してもらう分には何とか大丈夫と言う許可が下りた。けれど携帯電話は例え電源を切っていてもダメと言う事で、没収されてしまった。だから今の僕にはＨＰの状況がとても気に出しているが、確認する事は出来ない、ただ僕の友人達が管理、更新をしてくれると言っていたので、それを信じる事に決めた。それ以外に禁止されている物や禁止されている行動が幾つかあるが今はその説明をするわけにはいかない、なんせバッテリーの電池レベルがもう半分を過ぎようとしているから、だからその事は追々話すことにしよう。とにかく僕の場合は特に入院初日と言う事もあり、制限される事が常連の人達と比べて多かった。
それは僕の想像とは大きな違いがあった。入院する前までは医者は君の場合任意入院だから、自由が利くんだよ。なんて言っていたが実際入院したらそこには自由なんて存在していなかった。病棟から出るなんて事は当然出来ないし、病棟の中でも移動できる場所が制限されている。完全に医者に騙されたし、完全に僕の自由は奪われた。そんな状態だから

必然的に病室か喫煙所のあるロビーにいることしか許されていない。まさにそれは閉鎖病棟と言うよりも隔離された拘置所の様な場所だった。
　そんな中、僕が喫煙所にいると少しがたいの良い仮面ライダーの主人公にそっくりな佐藤さんと言う患者が僕に話しかけてきた。
「君は何でここに入院したの？」
　僕はそんな佐藤さんのそんな親しそうな話し方で心を開いた訳では無いけれど、その質問の答えを包み隠さずに率直に話した。
「・・・分裂・・・」
「やっぱりそうか、分裂病か、君の目見て直ぐに分かったよ」
　佐藤さんは大声で笑いながら、一人納得した様に僕に言った。僕はその笑い方と馬鹿にされた気持ちとで、少し腹が立ったけれど、怒るのは止めた。何せ怒って喧嘩にでもなれば、この病棟から一生出られなくなる事だって考えられる。俺はとにかくここから少しでも早く抜け出したいんだ、だから俺はこんな奴らにかまっている程暇じゃねえんだ。俺は耐える、そして俺は病気を治す。こんな奴らの様には絶対なってたまるか！！
　けれど佐藤さんは一見見た目ではとても精神病患者には見えない部分もあった。言葉も少しのどもりあるが、会話は成り立った。それに優しい部分も会話の中から見え隠れしていた。けれどただちょっと誇大妄想が膨らみぎみな部分があった。そんな佐藤さんが言うにはこう言う事だった。
「横浜の旭区にある神奈川県運転免許試験所とその前にある癌センターは実は昔自分家の土地だったと言う。それと実は相鉄線の二俣川駅に急行を止めるように仕向けたのは俺なんだ。けどこの話は誰にしても分かってくれねんだよ」
　佐藤さんは訴える様に僕にそう言ってきた。僕だってそんな事信じてはいない、けれど俺自身も偽りや膨らみ続ける妄想もきっと端から見れば同じ事なのだろう。俺とその佐藤さんの違いなんて誰にも分からないのだろうけれどそんな俺の気持ちとは違って、佐藤さんは自分で言って自分で勝手に納得した様に微笑みを浮かべていた。
　その他に何人かの人が俺に話しかけてきたが、今日の所は俺は完全無視をし続けた。
　俺は違う！！　俺はお前達とは生きてる世界が違うんだよ！！
・・・帰りたい・・・今すぐ抜け出したい・・・こんな場所から・・・僕のアイデンティティが壊れるその前に・・・
そろそろバッテリー切れかかってきたから今日はこの辺で終わらせる事にします。

～僕は遠回りしているのだろうか？　僕は最短距離を走っているのか？
僕はまっすぐに歩いているのだろか？　僕は間違ってはいないのだろうか？
僕は過ちを犯したのですか？　なぜ僕は苦しまなければならないのですか？
鉄格子のはめられた窓越しに映る夕日がとっても綺麗です～

７月１３日（木曜日）　天気（曇り）
　入院生活二日目、夕べは環境の変化や対人関係等の疲れやちょっと強くなった睡眠薬のせいでぐっすりと眠ることが出来た。けれど目覚めた朝が最悪だった。まだ中途覚醒の状態の俺を看護士が採血と脈を計りたいので処置室に来てほしいと俺に言った。俺はまだ中

途覚醒の状態でスリッパを履き処置室に向かおうとした。勿論そんな状態だからスリッパが塗れている事なんて気が付かなかった。そして俺は全ての検査を終えて部屋に戻って来た。そこで初めて俺のベットの足から真下にかけて小便らしき黄色い液体のようなもので塗れていることが分かった。俺は直ぐに自分が寝小便でもしていまったのかと思いベットとパジャマを見てみた。勿論パジャマにもその痕跡は無く、当然ベットのシーツにもその気配は無かった。俺は直ぐに看護婦を呼び事情を説明した。看護婦の話だと誰かが寝ぼけてそこに小便をしてしまったのだろうと言うのが看護婦の意見だった。けれどもしそうなら一体誰がこんな事をしたと言うのだろうか？　その疑問を感じた時看護婦が俺にこんな質問をしてきた。
「ちなみに斉藤さん、あなたは寝小便を最近したことや、寝ぼけてトイレ以外にしたことはありますか？」
　その質問は完全に俺を疑っている目だった。
「いえ、無いです。夜中に記憶もなく徘徊することはあるけれど、寝小便をしたことはありません。まさか僕がやったと言うんですか？」
　僕は寝小便をしない自信があった。けれど記憶の無い徘徊では何をするかは確かに分からない。そして看護婦はそんな僕にこう言った
「じゃあ斉藤さんが自分自身でやったって事にしておきましょう」
　僕はやっていない、僕は周りの人間とも違う。僕はまともな人間だ、けれど看護婦は僕の気持ちなんて何一つ考えてなんてくれなかった。そしてその結果僕はまた一人信じられる人を一人失った・・・。
　それ以外には仲間じゃ無いが、話し相手が少しずつ出来始めた。まず同じ病室の鶴川さんこと通称ツーさん、体重は軽く１００キロ以上はあるとっても体の大きい人だ。ちなみ風貌はスターウォーズに出てきたジャバジャハットにそっくりだった。そして年齢は今の所不明だがだいたい４０歳くらいだろうと思う。そしてやっぱり同じ部屋の僕のベットの正面に寝ている長谷部さんと言う人、年齢は正確には分からないけれどきっと６０歳は過ぎているのだろうか、話しをするきっかけになったのはハッカの飴玉をもらったのがきっかけで、話しをするようになった。 長谷部さんと言う男の人は顔の半分に縦に長い大きな傷を持っている。きっと若い頃はやくざか何かしていて、そのころに日本刀か何かで斬り付けられた傷なのかもしれない。少しずつ話しをし合える関係にはなったが、まだその傷跡の理由までを聞くまでお互い心を開いてはいなかった。いずれお互いの全てを話し合えるまで傷のことは聞かないし、聞けないだろう。もしも聞く機会が出来ればその時にはまた日記に書こうと思っています。
　それとその他で知り合ったのは病室は違うが誰にでも直ぐに話しかけるジャンキーで躁病の松本さん、推定年齢は３０歳くらいだろか、とにかくしゃべっているか動いていなくてはならないみたいで、狭い敷地を行ったり来たりしていた。そんな中女の子の話し合い手も出来た。一人は森さんと言う３５、６位の年齢だと思うがとても良い年の取り方をしていて中年の女性の魅力さを持っているとても綺麗な人だった。その他にも２６歳のちょっぴり可愛らしい小山朋子通称朋（とも）ちゃんとみんなに呼ばれている女の子とも仲良くなった。ちなみにこの閉鎖病棟の中では彼女（朋ちゃん）が一番若くて、僕が二番目に若いそうだ。要するに４０人近くいる病棟で２０代は二人っきりって事になる。きっとこ

の敷地は人生の最終地点（この世の果て）なのかもしれない。きっと年をとって発病したら最後、何処にも行けないし、全ての自由を奪われる事だってある。その点僕はまだ若い、やり直しだってまだ出来る。この閉鎖病棟でのシステムはイマイチ僕にはまだ理解出来ないが、そのうち理解出来るようになった時にはまた日記の中で説明したいと思う。

それと今日の出来事としては僕の女友達のＳさんがお見舞いに来てくれた。もともとＳさんもこの病院の精神科に通院していて、たまたま今日がその診察日だったってことで、寄ってくれた。けれどやっぱりＳさんもこの病棟の厳重なシステムには驚いていた。ちなみにＳさんは病院に対しての表面上は僕の親戚と言う事になっていた。とにかく面会でさえ、身内（親族を含む）以外はダメと言う事になっている。だからＳさんは僕の親戚と言う様に偽らなければならない。正直言って僕は少しずつこの病院のシステムに疑問を感じ始めてきた。

実際にもっとシステムの矛盾や自分の感情を伝えたいが、今日もまた「バッテリーが少なくなりました」と言う声がノート型パソコンから聞こえて来たので、この辺で今日の日記は止めようと思います。

～僕たちは希望を持っている　僕たちは素敵な夢をいっぱい持っている
僕たちは優しさだって持っている　そして僕たちは温かい温もりだって持っている
ただ僕たちはたった一つの自由を失ってしまっただけの事だった・・・～

７月１３日（金曜日）　天気（曇り）

今日は入院三日目だ、やっと少しずつこの病棟のシステムが分かってきた。とにかくこの病院は規制が厳しいのと同時に争い事が絶えないと言う事だ。俺が入院してから（この三日間で）争い事が４回もあった。原因は人がちょっかいを出してきたとか、人の言うことを聞かないとか、理由もなくむかつくからと人によって様々だ。今のところは俺は争い事に会っていないけれど、けれどいつ争い事に関わるか分からない。だけど僕はあまり争い事に交じらない様に心がけている。くだらない理由の喧嘩、そんなモノの為に入院が延びたり、拘束部屋（病院内ではガッチャン部屋と言う名称で呼ばれているらしい）で拘束着を着せられるのはまっぴらごめんだ。だから出来るだけ複雑な人間関係に関わらずに出来るだけ一人でいるように心がけている。元々僕は孤独でいる方が好きなので、孤独感と言うものは人より欠如しているのだろう、だから一人でいる寂しさはあまり感じることは無い、けれどそれとは対照的で人混みと言うのが全くと言ってダメな人間だった。結局のところ人間関係を確立する事が苦手なのだ。人は俺のことをシャイと言う人もいる、けれど俺はシャイでも何でもないんだ、ただ人間と言う生き物が俺にとっては複雑過ぎるのだろう、もしくは俺自身が生きるという事に不器用なのかもしれない。だからその結果孤独になりやすいのだろう。けれどこの閉鎖病棟の中では一人でのんびり過ごすことはとても難しい。病室に居れば居たで、同じ病室の人間が話しかけてくる。そして喫煙所に行ったら行ったでそこでも誰かと会ってしまう。だから必然的に孤独になるのは難しい。そんな状態だからトラブルにも巻き込まれやすい、そして人と接している時に俺の意識が混乱し始めると、どうしようもなくなる。すでにもう俺は嫌いな奴が何人か出来はじめている。やっぱり喧嘩の理由がハッキリしていても、喧嘩をすればガッチャン部屋（拘束室）に移

されるのだろか？　医者の話では１週間もすれば、少し自由にさせてくれて、もう少し経てば開放病棟に移してあげるから、だから今は我慢しなさいと言う。僕はその言葉を唯一の支えにしている。けれど医者が言う通りにならなかったその時は・・・。
　とにかく出来るだけの今は何も考えずに治療に専念しよう、もしもそれでも問題が起きてしまったら仕方ない事だと諦めるしかない。・・・早くここから出して・・・誰か僕を助けて・・・誰か僕にほんの少しの自由を与えて・・・自由を・・・自由を与えて・・・
　まだバッテリーは半分くらい残っているけれど、ちょっと訳あって今日の日記はここら辺で止める事にしよう。何故なら遠くから僕を罵る笑い声や罵声的な叫び声が聞こえてきたから・・・

～理由が分からない　原因も分からない　ただ気が付いたときに僕はここにいて
僕はここでずっと待っている
声が聞こえます　目の前に悪魔の姿が見えてます
きっと僕はここにいて　ずっとここにいるのかもしれないません
僕は膝を抱えてずっと震えています　けれど誰も僕を救ってはくれません
僕は何一つ悪いことなんてしてはいないのに・・・～

７月１５日（土曜日）　天気（曇り時々小雨）
　僕が入院をして初めての週末がやってきました。環境には相変わらず慣れていません。とにかくこの病棟に平常なんて言葉はありません。悪口、陰口、喧嘩、暴力そんな事は日常茶飯事です。僕の場合混乱、錯乱状態になると何をしでかすか分かりません。昨日もそんな状態で喧嘩に巻き込まれそうなりました。本当は昨日の出来事を昨日の日記に書こうと思っていたけれど、昨日の状況下ではとても落ち着いて書く事が出来なかったので、その事を今日の日記に書きます。
　昨日の時間的には夜の８時半位だっと思いますが、喫煙所で大喧嘩がありました。原因はツーさんこと鶴川さんと躁病の松本さん、いやあんなゲス野郎にさん付けなんて付けたくないので松本の野郎とでも言っておきましょう。とにかく松本と言う男はこの施設内のトラブルメーカーなんです。自分より弱い者や劣っている者には直ぐにからかったり、怒鳴りつけたりととにかく酷いしむかつきます。夕べもそのトラブルメーカーの松本が喫煙所の長椅子に寝ころんでいることをツーさんが注意をしたことに腹が立って大喧嘩が始まりました。僕はその近くにいたので、その喧嘩がきっかけで混乱、錯乱状態になってしまいました。そんな状態の中で、どこかから「やれ！！」（多分幻聴だと思うが）と言う声が聞こえてきました。僕はその喧嘩の仲裁に入るつもりだったのですが、混乱している僕は冷静さを直ぐに失ってしまうのです。気が付いたら松本の胸ぐらをつかんでいました。けれどあと一歩で殴り掛かろうとした時に他の人達が僕を押さえつけてそれで大きな過ちを起こさずに済んだ。けれど僕ら三人はその後沈静剤を注射されて各自の部屋に監禁状態になりました。けれどそれでも僕の混乱は続き幻聴が聞こえ続けていました。クスクスクスクス陰で笑っている声や僕の事を罵る声が続いていました。昨日日記の最後の部分はこの出来事の後に付け加えた部分です。だから少し中途半端な終わり方をしています。昨日はその日記を書き終えても混乱状態が続き眠る事が出来なかったので、僕は当直の医者に

言って抗精神薬と抗不安薬をちょっと多めに処方してもらいそれでやっと眠れる様になりました。ですので昨日はそんなに大きな事にはならなかったけれど、きっと僕が暴力を振るってガッチャン部屋（拘束部屋）に入れられるのも時間の問題なのかもしれない。とにかく僕の場合誰とでも仲良くやっていく事がとても難しいんだ。だから一度でも不信感、嫌悪感を抱くとその人間とは仲良くは出来ないし、一緒にすらいられなくなる。当直の医者に抗精神薬をもらう時にその事を相談したけれどその医者ですら曖昧な返事や、とにかく問題を起こせば君が拘束部屋に行くことなると言う言葉だけで、僕の心を救ってくれる言葉なかった。それどころかまるで僕が悪いかのような言い方をしてきた。だから僕は少し反抗的な言い方をしてその部屋を飛び出した。そして僕はまた一人信じられる人を一人失ってしまった・・・。

　ここからは今日の出来事を書きます。環境は相変わらず僕を孤独にさせます。僕が嫌いになった人はもうすでに五人以上になります。けれど大概の人はとても優しい人達が多いので、僕は少し安心感も抱けるようになりました。それと今日から僕は卓球クラブの一員になりました。卓球クラブと言っても殆ど遊びでピンポンに近く人数も僕を含めて六人位しかいません。だから表面上顧問の佐藤さんを中心に各自がやりたい時に参加すると言う形式です。初めて佐藤さんと出会った時はあまり良い印象が無かったのですが、ここ四日の入院生活で仲良くなりました。多少誇大妄想があるのかもしれませんが、とても優しい人です。けれどメンバーの中には顧問の佐藤さんを初め森さん（今のところ好印象）や野田さん（とても心が純粋な人、勿論好印象）や安川さん（まだよく分からないけれど今のところ好印象）と良い人達がいますが、あのゲス野郎の松本も入っています。だから僕はあまり入りたくなかったのですが、顧問の佐藤さんや森さんの一緒に卓球をやろうよと言う言葉で僕は仕方なく名目上卓球部員になりました。けれど松本がいると僕は出来るだけ離れる事（一緒にいると喧嘩をしてしまう可能性があるため）にしているので、殆ど卓球に参加出来ません。だから松本が卓球をしている時は僕は部屋に閉じこもっていなければなりません。別に松本が怖いからと言う事は一切ないのですが、喧嘩、暴力はこのシステム（施設内のルール）では厳禁なので、僕は自分から離れる努力しなければなりません。とにかく僕は一日も早くこの病棟から出たいし、ガッチャン部屋（拘束部屋）にも行きたくない。そのために僕は争い事の起きそうな状況のある場合は意図的にその場から離れる事をしなければならない。そうなってくると本当に僕の居場所は自分の病室のベットの上以外に行ける所がなくなってしまう。

　・・・孤独なシステム・・・それは僕の為に作られたシステム・・・僕を縛り付けて束縛するシステム・・・

　僕はこんな縛り付けられたシステムの中で、自分自信の平常心を保つことが出来るのだろうか？　もしも僕の入院が一ヶ月程度のものだとすれば、あと２７日位で退院が出来る。僕はがんばるよ、絶対に負けない、どんな挑発に負けはしない！！　くたばれ松本！！

～争い事の無い世界　傷付くことはもう何もない　君は笑顔で僕の話を聞いてくれる
それを平和と呼べば良いのだろうか　もしくはそれを自由と呼べば良いのだろうか
僕の夢の続きはこんなところ　けれど悪魔が密かに僕に向かって微笑んでいる
僕はまた過ちを犯してしまうかもしれないね　悪魔がこの世にいる限り・・・

７月１６日（日曜日）　天気（曇りのち晴れ）
今日はあまり話す出来事が無かったので、この病院のシステムの事を少し書くことにしよう。まず僕が今いる病棟は国立療養所久里〇病院の東側にある、東５病棟と言う名称になっている。もともとこの病院は結核の隔離病院だったらしく、そのシステムは療養所とはとても呼べないものだ。けれどある時期からアルコール中毒患者の治療を取り入れてからはアル中で有名な病院になったらしい。全部で七つほど病棟があるのらしいが、僕は全部を見たことは無い。ただ７病棟が一番開放的な病棟というのは７病棟から移ってきた人の話で分かった。けれどこの東５病棟はとにかく閉鎖的な病棟である事は間違いがない。
　まず初めにこの病棟の入り口でその存在をアピールされてしまう。厳重にロックの掛かった重い鉄の扉が入り口に二重になって存在している。だから例え一つの扉をクリアーしても外に出ることは無理だった。それと棟内でも行ける場所は限られている。女の子達の部屋がある廊下は男性禁止になっているし、ガッチャン部屋（拘束部屋）にも行くことは出来ない。だから必然的に男子部屋の前の廊下か食堂のあるロビーにしか行くところが無い。こんな環境下の中では療養なんて出来るわけが無い。けれど病院側はそのシステムを変えることはない。出来るだけ動かないと言うのが静養と考えているらしい。けれどそんな何も出来ないと言う現状は少なくとも僕にはストレスの固まりとなって苦しめるものだ。殆ど何もしないうちに一日は過ぎていく。唯一開放時間と言うのが看護士付きのお買い物（本館の売店に行くだけ）と言うものくらいしかない。それ以外は病棟で過ごさなければならい。お風呂だって週に月曜と金曜の二回しかない。そんな生活に一体何の意味があるのだろうか？　それは生活面は勿論のこと持ち物にも言えることだった。まず持ち物の中で特に禁止されているものは危険物（ナイフ、カミソリ、ハサミ、針、ライター、マッチ、缶切り、薬品、ガラス製品、瀬戸物、ベルト、手鏡、パンティーストッキング、ズボンの紐、電源アダプター、等）がある。勿論それ以外にも禁止されている物もある、特に音の出る物（ラジオ、ラジカセ、テレビ等）や臭いの出る物（ヘアートニック、アフターシェイビングローション等）やこれは何処でも共通だと思うが携帯電話がある。よくもまあこんなにまで禁止物を見つけたなと逆に感心させられてしまう。けれど僕の場合はわがまま言えないのかもしれない、何故なら持ち込み禁止の項目にワープロと言う項目があったが、何とか特別許可を出してもらったのだから。だけど原則としては充電をする際はナースセンターで行い、病室で打つ時はバッテリーを使用すると言うのが条件だった。だから内容が途中で終わってしまうかもしれないけれど、その辺は理解をして欲しいところだ。まあ今日の言いたかった事はこれだけ制限をされて果たして療養と呼べるのかと言う事だ。それ以外に今日の出来事を簡単に説明をしよう。今日の昼飯を過ぎた頃僕の両親が見舞いがてら必要な物といらない物を整理しに来てくれた。その際僕のノートパソコン（ちなみに機種はＳＯＮＹのバイオＰＣＧ－Ｃ１）のＬ型バッテリーを持ってきてくれたことは強い味方的存在だった。多分これでバッテリー切れで話しを終わらせる率が少なくなるだろう。それと友人が二人午後の三時過ぎに来てくれた。けれど病院に対しての紹介は相変わらず親戚と言う事になっている。理由は分からない何故身内だけが許されて友達が許されないだろうか。僕の病状はそんなにも悪いのだろうか。疑問は病棟に一歩足を踏み入れた時から始まり出した。けれどその答えは担当医にしか分からず、僕の疑問だけが一人歩きして

いく。この３日間（週末と言う事もあって）僕は担当医と話しはしていない、最後に担当医と話しをしたのは１３日の木曜日の事だ。けれどその時確かに担当医は僕に言った。
「一週間もすれば多少自由にしてあげるし、調子が良いようなら折り合いを見つけて開放病棟に移してあげるから」
　その言葉だけが今の僕の唯一支えと呼べるものだろう。だから明日にでも担当医にあったらその事をもう一度ちゃんと聞いて見る事にしよう。今僕の願いはただ一つ、・・・先生・・・絶対に僕を裏切らないで・・・お願い・・・この僕を信じさせて・・・

～僕には自由がありません　僕は一体誰なのでしょう　何故僕はここにいるのだろう
頭の中が少し混乱しています　明日へ希望は一体何処からくるのでしょうか
聖なるしもべ達よどうか僕に教えておくれ　僕の犯した過ちのその意味を・・・～

７月１７日（月曜日）　天気（朝から快晴）
　今日は久しぶり朝から良い天気だった。今朝のニュースではもう関東地方は梅雨明けしたと言っていた。けれど僕の心の雨は未だ梅雨明けせずにジトジトと降り続いている。一体この僕の心の雨はいつになれば止むと言うのだろか、医者の目安は一ヶ月程度と判断しているらしいが、僕の本当の事（絶望的な悩み）を理解したならば、僕は一生この病棟から出られないのかもしれない。ちなみにこの僕の絶望的な悩みはいずれ何かの形で表さなければならないのかもしれないが、今はまだ誰にも言えずに一人で抱え込んでいる。けれどその中の一部でもこの入院生活の中で改善されれば良いと僕は思っている。ただここの入院システムには疑問を感じさせられる事が多い。全ての自由を奪い、全ての希望を奪われて一体何を目指して日々を過ごせば良いと言うのだろうか。そんな中で誰もが目指すモノは自由だ。ここで言う自由とはこの施設からの退院か開放病棟への移動になる事を示す。ちなみに今日も一人この病棟から退院して行った人がいる。その人は覚醒剤をやっていたらしく、その禁断症状の為に一ヶ月半入院していたと言う事だった。そして退院の寸前になるとみんなに握手をしてがんばれよと言う励ましの言葉をもらっていた。僕も本当にがんばって欲しいと言う願いから応援したけれど、それは自分自身に言っているようにも感じられた。とにかく誰もがこのシステムから開放される事を夢見ているんだ。だけどその先の不安な事は山ほどある。就職（仕事）がちゃんとやっていけるのだろか、生活はちゃんと出来るのだろうか、複雑な人間関係を問題なく保てるのだろうか、想いや不安な事は人によって様々だ。だから退院＝ゴールでは無い、むしろ退院＝スタートなのかもしれない、そうなってくると僕らはまだスタートラインにも立てない補欠でベンチにいる状態なのだろう。けれどこの施設には色々な人達が色々な心の傷を持っている事は共通なのかもしれない。傷付き過ぎて戦線離脱し、社会からはキチガイ扱いされてそして最底辺の刑務所か精神病院でもう一度傷や罪を癒したり償ったりしながら日々を送っていく。ちなみ僕の食事の時の左隣は２月の１６日に殺人未遂を犯して拘置所からこの施設に送り込まれた人なのだ。本人は病院で一生を過ごすのなら刑務所で四、五年暮らした方がよっぽどましだといていた。ちなみに殺人未遂をしたからといって別に僕は恐怖を感じることは無い、その人はとても優しい人だし、形や理由はどうであれ僕らは同じ様な傷を持っていると思えるからだ。だけどだからと言って許せない人間もいる。特に酷いのは前にも書いたが躁

病の松本だ。奴はとにかくうるさい、喫煙所で会った時も、食事の時（運が悪いことに俺の右隣は松本、でもそのうち席を変えてもらう予定）も、卓球をしている時も、暇さえあればしゃべらずにはいられないのだろう。けれど聞いているこっちはたまったもんじゃない。けれどまだ話し好きなだけでなら我慢も出来るかもしれない。しかし奴（松本）の場合はそれ以外に弱者を虐める癖がある。俺の場合は今のところちょっかいを出されてはいないが、２６歳の朋子ちゃんは格好の餌食になっている。今日も朋子ちゃんが喫煙所の灰皿の上にコップを置いたのが原因でそこにコップを置くな！　死ね！　馬鹿！　このクソアマ！！　と罵声を浴びせた。ちなみに朋子ちゃんは拒食症で、戦う気力も無ければ戦う力もない。たまたま俺が近くにいたから松本をその喫煙所から追い出してやったが、朋子ちゃんは悲し涙と悔し涙を流していた。俺はそんな朋子ちゃんの肩を優しく抱いて「もう大丈夫だよ、これから何かがあったら俺が守ってあげる。だからあんな奴の為に涙なって流すのはもったいないよ」と言ってあげた。勿論その言葉には恋愛的感覚は全く無い。それは恋でも愛でも無い、それはきっと言葉には表せられない感情なのだろう、とにかく僕は朋子ちゃんに同情していたことだけは確かだ。そして愛おしく思えたのかもしれない、けれど僕は人を愛することは出来ない、今は何も誰も愛せやしない。今の僕は償わなければならないモノがある。それが償いきれるその日まで、僕は戦わなければならない。
　だから今はただ時は悲しく凍てついた風となって過ぎていく、同じ傷を背負った二人の隙間の間を・・・。

～たった一つの過ちを犯した二人はエデンの園から追い出されてしまったね
僕がアダムで君がイブ　小さな過ちと大きな罰
まるで僕らは鳥かごの中の小鳥の様に震えていたね
たった一つの犯した小さな過ちを永遠に背負いながら・・・～

７月１８日（火曜日）　天気（曇り）
　夕べ担当医の診察を四日ぶりに受けた。診察と言っても処置室ではなくて、食堂のテーブルで１，２分受けただけだった。これでも診察料を取られるのだろうか？　多分取られているんだろうけど、診察をしてくれるだけマシだとみんなには言われた。酷い人は一ヶ月に１回あるかないかの人もいる。けれど１，２分の診察ではたいした話しなんて出来ない。夕べも本当に簡単な診察だった。
「斉藤さん調子はどう？」
　医者は必ずこの言葉から話し始める。
「平常心があるときは大丈夫ですけれど、混乱が始まるとまずいです」
「最近この病棟が荒れているからね、わかった、じゃあ薬を強くしましょう」
「そうですか・・・」
　たったこれだけの診察、果たして一体何が分かると言うのだろうか？　この病院のシステムは薬物療法だけで僕は自分らしさを保たなければならない。世間で言うカウンセリング等というものは無い。確かに今日処方箋が強くなったので、イライラ感は少し穏やかになり問題を起こす可能性も少なくなった。けれどそれと同時に脱力感が増す。頭はボーとして、体の動きが鈍くなる、そしてこの日記もそんな中で書いているので、時々支離滅裂

な事を書いてしまうかもしれないけれど許して欲しい。そう言えば昨日この病院の院長と言う人に会った。こんな事を書くと下品に感じるかもしれないが、この病院の院長はとっても馬鹿面だった。偉そうに副院長や看護士長を引き連れて人の肩を叩いてさんざん理屈をこねていたけれど、その殆どは無理矢理取って付けた様な理屈にしか感じなかった。とにかく院長が言うにはこの閉鎖病棟の中で集団生活をすることも治療の一環だから、がんばって過ごしてくれ、と言う事だ。けれど俺から言わせるとここで何週間か何ヶ月間を過ごしたところで外で上手くやって行ける気はしない。きっとこのシステムでは根本的な改善など出来やしないのだ。

　ちょうど今夕食の準備が出来ましたと言うアナウンスが入ったのでこの続きはまた後で書こう。

　先ほどの話しの続きをする前に今日の晩ご飯のまずさを書きます。今日の晩飯は本当にまずかった。ご飯は硬いところや柔らか過ぎるところがあり、おかずなんて食えたものじゃない。シーチキンとゆでキャベツ（芯ばっか）それとひじきが少々、みそ汁はもやしのみそ汁（ちなみに初めて見た）だ、本当手抜き料理もいいところだ。勿論全部なんて食べてはいない。ただでさえ食欲が無いのにこのメニューじゃ食べる気にもならない。たまたま１時半の買い物の時に瓶詰めのやわらぎを買って来ていたので、それをおかずにご飯を無理矢理食べたけれどそれでも３分１は残してしまった。けれどそんな状態で僕の栄養管理はされているのだろか？　僕はこの病院に入院してご飯を全部食べた事は一度もない。調子が悪いと３分１位しか食べられないし、調子が良くても３分２が精一杯、全部なんてとてもじゃないけど食べられないし、もしも無理矢理全部食べたとしても吐いてしまうから結局意味が無い。けれどそんな食生活のチェックも無ければ点滴をしてくれる事も無い。一体この閉鎖病棟の趣旨は何なのだろうか？　ある刑務所に入所していた経験がある人の話ではここは刑務所より酷いと言う話しだ。まあ刑務所ほどは酷くはないとは思うけれど、自由が無いのはちょっと辛い。けれど他の精神病院も中身は同じなのだろうか？　ここ病院の中の施設ではアル中専門以外はここ（東５病棟）が一番閉鎖的で、症状の重い人が入ってくるらしい。そしてそうでも無い人達が解放的な東７病棟に入院すると言う噂だ。そう考えると自分の心（病気を含めて）がとても複雑な気持ちになる。僕の病状はそんなにも重いものなのだろうか？　そしてこの病棟（治療方針を含めて）が果たして一番僕に適しているのだろうか？　疑問の答えはきっと医師の中にあるのかもしれない、けれど医師はまともに話しを聞いてくれない。僕の本当の心を医者に見せたらきっと僕は一生ここから出ることが出来なくなってしまうのかもしれない。だからもう少し治療方針を調べてから僕の話を聞いてもらう事にしよう。だから今はまだ本当の事は言わない、ちゃんと言えるその日が来るまで。

～僕の本当の姿を見たら　きっと君は僕を嫌いになるかもしれないね
僕の本当の心を知ったら　きっと君を傷付けてしまうかもしれないね
僕のありのままの姿　それは天使になりきれなかった堕天使なのだから・・・～

７月１９日　天気（曇りのち晴れ）

　今日で入院してから一週間が過ぎた。けれど今日は本当につまらない日になりそうだ。

何故なら僕の一番の話し相手の佐藤さんが外出許可をもらって外に出てしまうからだ。ちなみに前回（初日）に佐藤さんに対して誇大妄想がなんたらと書いてしまったが、その後色々話しを聞いているうちにそれは誇大妄想では無いような気がしてきた。佐藤さんは早稲田の法学部を出ていて民法の事なら何でも知っていた。そんな佐藤さんが何故こんな所にいるのかと言うと、公務執行妨害で留置所に入れられてそのままこの病院に強制入院させられたと言う事だった。まあ真意の程はどうであれその佐藤さんが一日いないと僕の日常生活は苦痛なものになる。喫煙所に行ってもあまり話し相手がいないし、もしも仮にいたとしても馬鹿な松本がいるだけでよけいイライラしてしまう。だから今日は一日読書の時間にしようと思う。今僕が読んでいる本（日曜日に買ってきてもらった）トマス・ハリスのハンニバルと言う本を読んでいる。ちなみに日曜から今現在まで読んだページ数は３４ページしか読めていないそれも内容は全く理解できない。元々僕は読書は好きだけれど、この病院の中では暇すぎて読むのがかったるくて集中できない。今この日記を付けているのは朝の９時過ぎだ。だからこの続きはまた夕方ににでも書くつもりでいる、その時にハンニバルのページ数がどのくらい上がっていくか楽しみです。それではまた夕方にでも会いましょう。

　朝の続きを書こう。僕は今日の朝、今日は読書の日と言ったが、実は今日はレクレーションの日と言うのを忘れていた。だから午後は８月２日に行われる盆踊りの練習をさせられた。だからそれによって本の読める時間があまり無かった（殆ど言い訳）。ちなみに本の読めたページ数は６６ページの第７章までだ。こんなんで趣味、読書、なんて言えたもんじゃないな。まあでも時間はこれからもいくらでもある。だから僕が退院するまでにでも読めれば良いのだろう。そのうち読み終わったら感想でも日記に書こうかと思っている。まあ何はともあれ今日は一日中退屈だった。だから日記もあまり書くことが無い。だから一日の締めくくりの詩をちょっと長めに書くことに決めた。

～僕には時間は必要ありません　だからその分思い出を僕にください
僕にはお金は必要ありません　だからその分自由を僕にください
僕には地位なんて必要ありません　だからその分愛を僕にください
僕には名誉なんて必要ありません　だからその分夢を僕にください
いっぱいいっぱいの愛を集めて　思い出を沢山作ったら君を少しは幸せに出来るのかな？
いっぱいいっぱいの夢を集めて　思い出を沢山作ったら君を少しは楽しませる事が出来るのかな？
いっぱいいっぱいの勇気を込めて君に告白したら　君は笑ってくれるのかな？
僕には時間もお金も地位も名誉も必要ありません　だからせめて僕を愛してください
僕の願いなんていつだってこんなにもささやかな願いなのだから・・・～

７月２０日（木曜日）　天気（朝から快晴）

　暇だ。ああああああああああ暇だだだだだだだだだだだ！！

　とにかく暇だ。今日は世間で言えば海の日で祝日になっている。けれど俺達にはまったく関係が無い。むしろ売店が休みで買い物にも行けない。だからと言って他にやることも見つからない。人間は時間が多すぎるとかえって集中力が無くなり何もやる気が起きない

生き物なんだ。小説も集中して読む気にもなれない、漫画ならなんとか読めるのかもしれないと思ってロビーにある漫画（少年ジャンプ）を手に取ってみた、けれど話しの前後が分からないものは読んでも面白くない。だから必然的に一話完結のものしか読めない。ちなみに読めたのは「こちら葛飾区亀有公園前派出所」だけだ。けれど話しはあまり面白くなかった。高校生の頃以来に読んだので、出てくるキャラクターの意味がよく分からなかった。しかし話しは変わるけれど、週刊誌の最後のページには未だに怪しい広告が載っているのには驚いた。履くだけで背が伸びる靴下「ハイ〇ップソックス」、広告には大ブームと書いてあるが、そんな話しは聞いたことがない。そして必殺フェロモンで女性をゲット「アダ〇９」９５００円、本当にそんなんで女性をゲット出来るのだろか？　それと相も変わらず痩せる薬「ヘムアイ〇ンダイエット」ゼイ肉をとり、スピード＆機動性のある肉体を造る！！　とにかくインチキくさい、僕の場合身長は１７８ｃｍあり体重が６４ｋｇ（現在は病気の為５７ｋｇ）で背が低い方でも無ければ、太り過ぎでも無い。顔は人によって様々だから分からないけれど必殺フェロモンを使う必要などない。けれどこんなインチキくさい広告でも購入する人がいるのだから通販はこわい。でもある意味効果はあるのだろうか？　どちらにしろ僕が購入したい物と思える物はその広告には無かった。

　漫画を読む以外に暇つぶし的な事は今日は見つからなかった。けれど昼過ぎに馬鹿な松本のせいで僕は鎮静剤を打たれた。理由は弱い者イジメだった。もうだいぶ前に松本のリンゴを夜中に食べてしまった人がいたのだけど、それに対しての松本が罵声をあびせていた。確かに人の物を取っちゃいけない、けれどその人は反省し新しいリンゴを買って返したのだ。けれどそのリンゴがめちゃくちゃまずいとか泥棒はイヤだイヤだ、泥棒は人間のクズだ！　と本人の目の前で言っていた。俺は思わずクズはお前だ！　と言ってしまった。勿論松本はそんな事で俺に怒りを向ける事はない、松本の得意な事は弱い者イジメだけ。だから俺の様に喧嘩を買うような人間には喧嘩を売らない。ずるくて卑怯な人間なんだ。そして松本はその場から唾だけを吐き捨てて、去っていたから大きなトラブルにならなかったが、俺と松本は興奮状態にあると言う理由で鎮静剤を肩から注射された。そのせいで今は体がかったるい、キーボタンも何度も間違えながら今この文章を打っている。ああ今日は本当に最悪の日だった。今頃横浜の港では花火大会でもやっているんだろう。去年も一昨年も僕は花火大会に行っていた。僕の一人暮らしをしている所が横浜市中区にある伊勢佐木町あたりにあるから、僕はよく歩いて見に行っていた。けれど今年は檻の中、目をつぶれば微かに聞こえる花火の音、昔が懐かしい、僕がまだ病気じゃなく元気だった頃、笑って女の子と行った花火大会の美しい思い出がよみがえる。僕は今涙が止まりません。今夜は久しぶりに涙で枕を濡らす事だろう。

～輝きたいのに輝けない　燃え尽きたいのに燃え尽きない
生き地獄（独房）　息が苦しい　誰か助けて
アイデンティティなんてもう関係ない　僕の僕らしさ？　一体何の意味があるの？
まともになりたいのに　まともじゃないシステムが僕を縛り付ける
正しさも過ちも同じように裁かれてしまう　僕は孤独　天涯孤独の正義の味方～

７月２１日（金曜日）　天気（曇り）

　そろそろアイデンティティが崩壊し始めている。ここは名前こそ療養所となっているが僕のいる環境は刑務所の様だ。一日中拘束をして混乱やストレスがたまると薬を体内に流し込める。こんな暮らしの中で僕らはモルモットの様に実験されているだけ。医者の診察も無ければ、カウンセリングも無い。ただこの病棟の中で束縛されているだけ。これじゃ刑務所となんらかわりがない、唯一僕らが楽しめるものと言ったらまずい食事と１５分位の買い物の時間だけだ。それ以外は薬を処方されるだけで、一日が終わる。だから日記もあまり面白い事が書けない。ちなみに昨日の最後の詩に正義の味方と書いたのは、僕は虐められている人を助けたいと思ってしまう。その結果トラブルに巻き込まれる事が多くて自分自身が混乱してしまい安定剤を注射される事になってしまう。けれど昨日看護士長から君は正義感があるから、君がリーダーとなってみんなをトラブルに巻き込まれない様に守ってもらえると一番いいんだけどな、と言われたのが昨日の詩の一部となった。勿論正常な僕だったらそんな事は喜んで引き受けるだろう。けれど今の僕は心の病気で入院している事と外に自由に出られないと言うストレスでいつ逆にトラブルを起こすか分からない。ただ分かることはこんな閉鎖病棟にいる限りまともには成れないと言うのが本音だった。けれどこんな環境の中でも良いこと（正確には複雑だが）もある。小山朋子（通称朋ちゃん）にどうやら僕は惚れられてしまったらしい。朋ちゃんの正式な病名は分からないけれど、拒食症の症状があることは分かっている、顔は可愛いんだけど体は痩せすぎで、ちょっとでも風が吹けば飛ばされそうな体つきだった。勿論顔や体つきは関係ないし、惚れられたと言っても一時的なもので愛だ恋だと言うものでは無い。こんな環境下ではまともなモノなど何もない。だから僕も朋ちゃんの事はきっと人として好きだと思うけれど愛や恋と言う感覚は起きない。だからこの先どうなって行くのか分からないけれど、どちらにしろこの病棟から出ない限りまともな事は考えられない。
・・・可愛い朋ちゃん・・・純粋な朋ちゃん・・・僕よりちょっぴり年下の朋ちゃん・・・愛おしく思うよ、だから僕が守ってあげる、この矛盾だらけの俗物社会から・・・

～愛って何なのだろ　恋って何なのだろ
優しさだけでは君を守れない　温もりだけでは君の心を癒せない
だけど僕はいつでも君のそばにいるよ　君が僕を愛し続けている限り・・・～

７月２２日（土曜日）　天気（晴れ）
　今日で僕が入院して１０日が過ぎた。一日一日はとても長いけれど、過ぎてしまっては早く感じるものだ。僕が世間から離れている間にも世の中は変わり続ける。二千円札が発行されたり、沖縄サミットが始まったりと色々な出来事がある。けれどこの病棟にいる限り僕にとっては全く関係がないように感じられてしまう。・・・世間と別世界・・・共通するものは天気くらいのものなのかもしれいとついつい考えてしまう。まあそれはそうと朋ちゃんはここのところずっと僕にアプローチをしてくる。
「ここから出られたら、マンションにカボチャサラダを作りに行ってあげるね」とか「私は和彦さんがいるからがんばれるのよ」とかそう言う会話が自然と出てくる、僕は果たして嬉しいのだろうか？　まだお互い分からない事が多すぎる為に現実感はなくなる。それに閉鎖病棟の中では恋愛の対象者も限られてくるのだろう。果たして本当に朋子ちゃんは

僕を好きなのだろうか？　この病棟から出て世間の風に巻かれても僕を好きでいられ続けるのだろうか。朋ちゃんは確かにこう言った。
「もしも私が先に退院したら待ってるから、和彦さんが先に出たら待っててね」
　その言葉を僕は純粋に受け止めるべきなのだろうか？　今まで信じて裏切られた事は沢山あった。けれど朋ちゃんの目は真剣な眼差しだった様な気がする。けれど逆に僕自身の気持ちはそれとは対照的であやふやなものだった。それは好きじゃないとかそう言うものでは無くて、この閉鎖的環境下の中では冷静に物事を考えられないと言う事なんだ。今僕は好きな人（恋人）は居ない、だから物理的にはその小さな愛の花を手に入れる事は出来るのだろ、けれどその小さな愛の花を育て行くことが出来るのだろうか？　そうなってくると頭の中は混乱し始める。だからせめて一時の自由が欲しい、安らかに落ち着いて考えられる環境が欲しい。そうすれば多少は考えられるけれど、答えは誰もが望んでいないものになる可能性もある。僕の絶望的悩みに一つに人をもう誰も心から愛せないと言うモノがある。その理由は色々あり、簡単には説明できないけれど、とにかくそう言う悩みがあることは事実だ。ただ今は朋ちゃんがそれでがんばれるのなら僕は白馬に乗った王子にもなるし、スーパーマンにだってなれる。僕という人間を必要としてくれる人が居続ける限り僕は生きていける。だから僕は今は朋ちゃんの白馬の王子様ってところなのかもしれない。だから朋ちゃん大丈夫だよ、いつだってどんな時だって僕が守ってあげるから。

～僕らは出会って間もない二人　ちょっぴり恥ずかしがり屋の君と僕
手探りでしか前に進めない二人　ちょっぴり怖がり屋の僕と君
だからこの手を絶対に離さないで　だって僕は君なしでは生きて行けないのだから・・～

７月２３日（日曜日）　天気（朝から快晴）
　今日で入院してから一体何日が過ぎたのだろうか？　もうあまり思考回路が働かなくなって来ている。だから今日はこの病院の矛盾点を幾つかあげよう。まず初めに言いたいのはこの病院の食事の事だ、食事はどの病院でも不味いと言うのは定番なのだろうけれど、ここの病院は特に不味い。一番おかしいのは肉料理だろう、肉が硬い人はハサミで肉を切りますよと言われることがある。だったら初めから硬い肉なんて出さなければいいのに何故か硬い肉が当たり前のように出てくる。僕の場合は若いから多少硬い肉でも食べられるけれど、年寄りや入れ歯の人には食べられる代物じゃない。それに食事自体もとにかく不味い、僕は今摂食障害気味で食欲がわかない、それなのに出てくる料理と言う料理は食欲を無くすようなものばかりだ。ちなみに刑務所経験者が言うには刑務所の飯の方がまだマシだったと言う、これにはさすがの僕も参ってしまう、だから必然的に食欲がわかずに食べ物を残してしまう。これじゃ体の調子は悪くなる一方だ。病院に来て体をこわすなんて笑い話にもならない。けれどこの病棟はもっと可笑しい事がある。それは睡眠薬の事なんだけれど、僕らは通常８時に睡眠薬をもらって、９時に消灯となる。けれど時には８時前に眠ってしまう人がいる。そこで可笑しい事はもういびきをかいて眠っている人を叩き起こして「はい睡眠薬ですよ」と言って睡眠薬を飲ます。これは完全におかしな行為だろう。睡眠薬は眠れない人の為に出すもので、寝ている人を起こしてまで飲ませる事は無いだろう。けれど病院と言うところは規則があればその規則を守ろうとする。言わば臨機応変と

言う事が出来ないし、しようとはしない。決められたルールを守りそれに反した者は独居房に閉じこめて強制的にルールを守らす事をする。本当にここは刑務所並の場所のような所だ。だから早く僕はこんな所から抜け出して自由な世界に行きたい。そして自由になった僕は平和の詩でものんびりと書きたい。けれど今の僕はまだ入院して三分の一位しか過ぎていない（一ヶ月程度の入院予定が前提として）だからもしかするとまだこの病院のシステムに馴染んでいないだけで、もう少ししたらこんな矛盾だらけのシステムに馴染んでしまい、これが当たり前のように感じてしまうのかもしれない。けれど今の僕にはそれが出来ない何故なら今の僕には失いたくない大切なモノがあり過ぎるから・・・。

～ちっちゃな夢を握りしめ　僕は旅にでも行こうかな
ちっちゃな自由を握りしめ　僕は旅にでも行こうかな
ちっちゃな僕をポケット詰め込んで　僕をここから連れだして
僕の存在が君の心から消えてなくなるその日まで・・・～

７月２４日（月曜日）　天気（晴れ）
　僕は時々思うことがある。それはこの日記は果たして面白いものなのだろうか？　と言う事だ。書いている本人は面白い部分もあるけれど読み手にとっては面白いものでは無いような気がする。数年前に僕はアンネの日記完全版と言うものを読んだが、それはちっとも面白く無かった。日記というのは物語性と言うものがないから、せっかく話しが面白くなって来たのに次の日には話題が変わり、つまらないものになることがある。だから日記というものは個人（書き手）だけの自己満足で終わってしまう事が多いのだ。この日記ももしかするとそう言う意味では第三者にしてみれば全くつまらないものなのかもしれない。けれど僕は僕自身を理解してもらいたいが為に日記を書き続けよう。だから今日も日記を書きます。ちなみに今日の出来事ではあまり面白いことは無かったけれど、一つだけ良い知らせがあった。それは担当医の話では何も問題を起こさなければ、今週の水曜日あたりに、一時外泊が出来るかもしれないと言う事だ。本当に僕はこの言葉をずっと待っていた。まあ退院とは違って一泊すればまた元に戻ってこなければいけないので、本当の意味で嬉しいと言う事は無いけれど、この病棟に入院してから初めて外の空気を吸えると言う意味では大きな一歩だ。外出、外泊が続けば退院も近くなるし、気持ちも前向きになるというものだ。だから僕は今とても嬉しい気分でこの日記を書いています。けれどこの嬉しさは本当に外泊が出来るまで安心は出来ない。なんせ医者の気まぐれで外泊が取り消される事なんてよくある事らしい。５月に起きたバスジャック事件があってから、医者の目は変わったらしい。その頃退院予定があった人が未だに出られなくなり、未だに入院をしている人もいるくらいだ。だから僕自身が何も問題を起こさなくても世間で精神病患者の事件が起これば、僕の一時外泊も取り消される事もある。だから出来るだけ現実社会も問題を起こさないで欲しい。だって僕の一時外泊を取り消されるのは絶望的な悩みになってしまう可能性だってあるのだから。まあ何はともあれ、僕は２６日（水曜日）に外泊をする。その際にあたって、闘病日記前編をＨＰ上に載せる予定なので楽しみにしていて欲しい？
ちょっとおかしいな、これを読んでいる人はこの日記を全て読み続けた人だけが見れるので、この時点で殆ど読んでいる訳だから楽しみにしておいて欲しいというのは適切ではな

いかもしれない、まあでもこれ以上考えると頭がまた混乱し始めるので、今日の日記はここまでで終わらせてもらう事にしよう。それじゃあお休みなさい。

～一つの自由を見つけたら　二つの幸せ見つかった
一つの夢を見つけたら　二つの幸せ見つかった
一つの愛を見つけたら　二人の幸せ届くかな・・・～

７月２５日（火曜日）　天気（曇り時々雨）
　今日を何事もなく過ごせれば闘病日記の前編が終了します。明日は待ちに待った、一時外泊が許可されているので、そうなればこの闘病日記の前編を友人にメールで送ってアップデートしてもらえるので、前編の日記は今日が最後となるんです。だから今日はまとめ的な事を書きたいと思います。
　僕は７月１２日にこの国立療養所久里〇病院に入院をしました。それから二週間が経ちます。入院して初めて知った閉鎖病棟、僕の全ての自由は入院したその日から奪われました。時には騙されたと言う感情が自分を支配していた事もあったが、過ぎてしまえばそんな感情も無くなり、今では一日を有意義に過ごせるようにまでなりました。ただ治療の効果があったかと言われるとそれは分かりません。けれど僕はこんな束縛された生活を耐えたと言う意味では多少は良くなったと言う事なのかもしれません。ただ自分でも勘違いしないようにしなければならないのは、明日はただの一時外泊と言う事だけであって、退院じゃない事をしっかりと理解しなければならない。ただ医者の話では問題さえ起こさなければ、外泊を多めにしてくれて、それでも問題無ければ開放病棟に移してくれると言う事まで言っていました。これは今の僕にとっては唯一の希望です。・・・自由・・・なんて良い言葉なのだろうか、こんなに自由を意識したのは高校生の頃以来です。そしてこんなにも喜べるのは初めてかもしれません。もしもこの日記を読んでいる人で、精神病院に入院を考えている人がいるのならば、絶対によく考えたほうがいいと思います。特に閉鎖病棟に入院を考えているのならばなおさらです。でも不思議に思うのはこんな環境下に三ヶ月も半年もいる人の気持ちが分からない、多分僕がそんな状況になったら自殺でもしてしまうんじゃないかってつくづく思います。まあ僕の場合は今のところ大きな問題を起こしていないので、一ヶ月程度で退院出来る予定なので、あと半分ちょっと我慢すれば、無罪放免なのでがんばれる気がします。とにかく今は足を踏まれても我慢しなければなりません。それ自体も辛いかもしれないが、問題を起こして退院が長引くのはもっと辛いので、何でも我慢します。例え幻聴、幻覚が現れても今は無視していることが大切なんです。ちなみに今は薬を強くしてもらった為に混乱や錯乱（幻聴、幻覚を含めて）は起きにくくなっています。だから何とか乗り越えられそうです。だから早く良くなってまた連載詩集等も始めたいと思っています。とりあえず前編のまとめにはなっていないけれど、この辺で前編を終わらせます。

～僕はここにいます　僕はずっとここにいて　これからもここにいます
だから誰か僕を捜してください　そして僕を抱きしめてください
僕は愛の消えた街で彷徨っています　愛を探して彷徨っています

だからそんな僕を見つけてください
だって僕は君に出会うために生まれて来たのだから・・・～

※注※
この日記に書かれていることは真実です。ですが登場人物の名前は変えています。
そしてここに書かれていることは僕の偏見で書いてある部分もありますので、その辺は曖昧にとってください。最後に後編はどうなるか分かりませんが、これからもよろしくお願いします。　Kazuhiko　Saito